

遊星人の海外研究記 その18 ～想像よりは暮らしやすかった中国～

青山 雄彦¹

1.はじめに

私は博士の学位を2019年に取得した後、程なくして中国北京の清華大学 (Tsinghua University) でポスドクをはじめました。その後2022年に同じくポスドクとして北京大学 (Peking University) に異動し、2024年からは中国広東省の中山大学 (Sun Yat-sen University¹) で助教をしています。気づくともう6年近く中国で研究していることになります。

私は清華大学のポスドクに採用されるまで、中国には一度も行ったことがありませんでした。オファーをくれたXuening Baiも含め中国に知り合いはいませんでしたし、積極的な海外志向もありませんでした。そんな私が中国でこれほど長い時間を過ごし、今や教員なのだから、わからないものです。

上述の通り、ポスドク就任前の自分にとって中国は『未知』そのものでした。なんなら正直、印象は少し悪い寄りでした。色々経験した今中国が『良い場所』かと問われると、良い点も悪い点も思いつくので返答に困ります。ただ少なくとも、私が渡航前に思っていた環境とは違いましたし、渡航前の想像よりはすごしやすい場所でした。

中国では新設された (される) 天文学科も多く、研究者の数も、教員やポスドクのポストの数も、今まさに増え続けています。皆さんにとって中国で研究するという選択肢がアリかナシか、私には分かりませんが少なくとも存在する選択肢を知らないのは勿

体無いのかなと思い、中国での研究環境を少しでも知るきっかけになればと考え、この記事を書くことにしました。中国を選択肢に入れるかどうか。この記事が皆さんの判断の一助になれば幸いです。

2. なんで中国に行ったの？

私が清華大学のポスドク公募に応募したのは、博士最終年である2019年1月だったと記憶しています。それ以前にもAAS Job Registerでポスドク公募を確認はしていたのですが、応募するには至りませんでした。「そんなことよりD論書かなきゃ!」というのが本音でした。新年すぐに博士論文を提出した後、出せそうな公募に、締切が近い順に4・5件応募しました。その後、博士論文発表会を終えた2月、オンライン面接を経てオファーをくれたのが清華大学のXuening Baiでした。この時オンライン面接を控えた公募は他にもあったのですが、面接予定日はオファーへの返答期限の後でした。今思えばXuening Baiなら頼めば返答期限を伸ばしてくれたでしょうし、指導教員の生駒先生にも「お願いすれば?」とアドバイスをもらいました。しかし当時、まだ博士論文の訂正作業中だった私は、この簡単な交渉すらしたくありませんでした。「とりあえずポストを確定させて心配を一つ減らしたい!」と思った私は、清華大学のオファーを受けることに決めました。研究面で

1.中山大学 物理与天文学院
aoyama@sysu.edu.cn

¹中国語と英語で音が全く違いますが、両方孫文のペンネーム。日本では孫文、中国では孫中山、欧米では孫逸仙として知られている。



図1: 10日ほど滞在した激安宿の部屋とトイレ。左写真の扉の影にあるのが右写真のトイレ兼シャワー室。右写真のトイレの右上に写っているパイプがシャワーパイプ。トイレとシャワールームを一緒にするという、まさに異文化の洗礼でした。

魅力的なオファーでしたし、「中国のことはよく知らないけど、まあ何とかなるだろう」と思っていました。

3. 中国って実際どうなの？

失礼な話ですが、中国に行く前の私は中国のことを漠然と『先進国と発展途上国の中間』みたいに思っていました。しかしオファーをもらった後、中国へ初上陸した私が見た北京は、イメージと違って良くも悪くも普通でした。もちろん文化的な違いは感じますが、それは欧米の都市でも同じことです。「面白い土産話はできそうにないな」とちょっとガッカリする部分もありましたが、冷静に考えると生活する街におもしろさなんて要りません。外面だけ見て「これなら普通に生活していけそうだな」などと思った私は、この時完全に油断していました。

そもそも不幸の始まりは、宿代をケチったことでした。清華大学では大学がキャンパス内に持っているアパートを借りる予定だったのですが、この物件は着任手続きが終わらなければ入居できません。そこで着任手続きが終わるまで10日ほど、適当な部屋を借りることになりました。中国といえど物価が安いイメージだったのですが、しかし予想に反して宿泊費が安くありません。良さそうなホテルは1泊1万円以上しますし、そこそこのホテルでも7千円ほど。卒業したばかりの当時の私には10泊もすると痛い出費です。そこでAirbnbを使ってもっと安い宿を探すと……ありました。1泊3千円弱の宿が大学のすぐそばに。個



図2: 清華大学のキャンパス内にあるポストク向けアパート。1LDKで家具付き、何よりトイレとシャワーが別室!

人でやっている寮のような物件で、おそらくお金がない学生が大学を訪問するときに使うのでしょう。お金がないほぼ学生の私は、この物件に滞在することに決めました。

部屋に案内されると、ベッド2個分ほどしかない狭い部屋（図1左）。しかし値段相応と言うべきでしょう。何の問題ありません。しかもトイレとシャワーが個室にあるそうです、素晴らしい。案内されるがまま部屋の一角を見ると……そこにはトイレ兼シャワールームがありました（図1右）。汚いトイレと清潔であるべきシャワールームを合体させるという、許容し難い組み合わせ。これが激安宿の洗礼か……。しかし翌日、オフィスで同室になった中国人ポストクにこれを愚痴ると、「ああ、まあちょっと古いとそういう部屋もあるよね」と予想より弱いリアクションです。もう少し詳しく聞いてみると、「体を洗った水でトイレが掃除されて効率的でしょ？排水を共有するとスペース的にも建築的にも効率的だし」とのこと。なるほど、合理的です。理解はできますが、私の人生で出

会った中でもとびきり嫌な合理性です。

後の経験も踏まえて考えると、おそらく日本と中国では『清潔』の概念がかなり違います。この件以外だと、(かなりインパクトは落ちますが) 食事中にもカルチャーギャップを感じるがあります。中国人は料理に含まれる非可食部²を取り除くとき、机に直置きします。スープや油が机やテーブルクロスを汚してなんとなく嫌な気分になりますが、この『嫌な感じ』は中国人には共感してもらえません。しかし清潔さは求めているようで、入店時にテーブルが汚れていると必ず清掃を要求します。どうやら中国での清潔さとは「清掃されて綺麗になっていること」であり、「汚さないこと」ではないようです。逆にいうと中国人は清掃をきちんとすれば清潔になったと感じるのでしょう。そう思ってトイレ+シャワー室問題を考えると、つまり「綺麗に掃除されたトイレは汚くないから、そこでシャワーを浴びても良い」ということなのでしょう。なるほど納得ですね。共感ではきかぬますが。

以上のような経験があったので、清華大学が貸してくれるキャンパス内のアパートにも、正直期待していませんでした。値段が月3万円程度と安かったのもあって、値段相応の物件を想像していたのですが……まさかの想定外。広くて綺麗な、そして何よりトイレとシャワーが別室という、大変素晴らしいアパートでした(図2)。私はコロナの期間、中国から動けなかったので主に自室で過ごしていましたが、この快適な部屋のおかげで不満なく過ごすことができました。もし部屋の質が悪かったらコロナ期に日本へ逃げ帰り、解雇されていたことでしょう³。ちなみに北京大学に移った後は大学のアパートが条件に合わず、自分で北京市内のアパートを借りたのですが、部屋の質が下がった上にトイレ・シャワーが同室(仕切りは有り)になったのに家賃は月15万円でした⁴。その

時初めて実感しましたが、北京の家賃相場は東京と比べてもかなり高額です。他の物価は大概日本と同等以下なのですが、こうしてみると、やはり清華大学時代は非常に恵まれていました。

激安物件でのカルチャーショックで出足は挫かれましたが、慣れてみれば中国もそれほど暮らしにくくはありません。上述のように住居選びには注意が必要ですが、きちんと確認して、少なくともコストをかければ何とかなります。他には中国では英語は基本通じませんが⁵、オンライン通販で食事も含めてなんでも買えるので⁶、案外言語が通じなくても何とかなります。またレストランでもQRコードを読み込んでアプリで注文するのが主なので、後はうんうん言うておけば中国語を話さなくても大丈夫です⁷。大気汚染の影響は、特に北京では目視できるレベルで酷い日もありますが、研究者は大体部屋にこもっているので良い空気清浄機を買えば(おそらく)大丈夫です。また治安は正直、日本より良いかもしれませんが⁸。反日感情を気にする人もいるかもしれませんが、特定のイベント・集会に近づかなければ、日常でそういった極端な人に会えることはまずありません。というわけで最後は駆け足になりましたが、私は「中国、行く前に思っていたよりは暮らしやすいな」と思っています。

4. 中国の大学ってどうなの？

中国と日本の大学の違いを考えたとき、やはり一番はその大きさです。清華大学の北京キャンパスは特に大きい方ですが、その面積は東大本郷キャンパスの約8倍もあります⁹。これは、大学のキャンパスが学生の生活区域を含んでいるためです。中国の大学生は基本的にキャンパス内の寮に住み、キャンパ

²魚や動物の骨、調味料で食べないスライスなど。ちなみに私は渡航後すぐ、スープに入っていた親指大の鶏肉に骨が隠れていることに気付かず全力で噛んで歯が1本折れました。中国で肉を食べるときは常に骨が中に隠れていることを想定しましょう。

³コロナ期間中、海外に帰省して中国に戻って来ない(来れない)研究者が大量にいたため、「中国国外に半年以上連続して滞在した者は自動的に解雇になる」という制度が作られました。

⁴間取りは1K。1部屋が大きいタイプでしたが清華大学のアパートに比べて床面積は減っています。月10万円を切る物件は図1のようなトイレ+シャワーの古い物件がほとんどでした。

⁵上海だとそこそこ通じるのかもしれませんが^[1]、少なくとも北京では通じません。

⁶中国版 UberEatsのようなものがあるのですが、宅配費は大抵100円以下。最悪毎食これでも生きていけます。

⁷中国語の「うん」は一般的な相槌です。目上の人にも使えます。

⁸街中に監視カメラがあるので、場所と角度によってはスリや置き引きですら捕まります。「中国の犯罪者は国内で犯罪ができないから海外でやる」というジョークもあるとかないとか。

⁹ちなみに北京大学のキャンパスは清華大学の隣にあるのに面積は半分程度しかありません。北京大学の学生はよくこの差について文句を言っていますが、それでも十分広いと思います。

ス内で生活します¹⁰。つまり学生が利用するためのスーパー、雑貨屋、床屋や映画館まで、さまざまな施設がキャンパス内に含まれているのです。生活に必要なものは娯楽も含めてある程度キャンパス内で揃うので、キャンパス内だけで生活を完結することができます。しかも学食を筆頭にキャンパス内の生活費は外に比べてかなり安くなっている¹¹ので、ポストク・教員を含め、理由がなければ学外に出る必要がありません。私は趣味のボウリング¹²で毎週末外出していましたが、1ヶ月以上キャンパスから出なかった日本人も知っています。

逆に研究・学生指導のやり方は日本と大差ないと思います。毎週学生セミナーと来客のコロキウムがあって、これにチーム毎のミーティングが加わります。セミナーやミーティングは全て英語で行われますが、これは外国人の私がいるというバイアスもあるので、一概に「中国の方が国際的だ」とは言えません。実際中国人しかいないグループミーティングは中国語でやっているようですし、大学の授業も基本的に中国語です。ところで日本と違うなと思った制度もあるのですが、どうやらそのうちいくつかは中国式というよりアメリカ式だったようです。例えば中国では来客があるたびにオンラインのExcelシートが回ってきて、個別に議論するスロットを先着順で予約して行きます。これは中国式なのかと思っていたのですが、このシリーズの過去記事を読んでいてアメリカ式だったことに気づきました [2]。最近ではアメリカ帰りの中国人研究者が多いので、彼らが慣れ親しんだ方法で運営しているからでしょう。

また、中国の学生の英語レベルや外国人への対応も日本と似ていると思います。もしかしたら「中国人は英語が上手い」というイメージを持っている人もいかもしれませんが、これは「海外に進出した中国人」というバイアスがかかっています。基本的に学生は英語で会話をしながら、話しかければ頑張って会話してくれるという感じで、学生時代の自分を見る

ようです。ただ、清華大学・北京大学の学部生には大学院から海外進出する予定の学生も多く、彼らの英語はかなり流暢です。人によっては中国内の国際学校で小中高と英語で教育を受けてきた、みたいな人もいます。なので中国では学部生と大学院生で英語力の逆転現象が起きており、英語のセミナーでいつも質問する学生を大学院生だと思っていたら学部生だった、みたいなことが結構あります。そうはいつても学部生とポストクが接する機会はあまり多くないので、残念ながらやはり、外国人ポストクに話しかけてくる学生はあまりいません。自分が学生だった時は「下手な英語で話しかけて相手の時間を奪うのも申し訳ないし」などと思って話しかけづらかったのですが、逆の立場を経験した今では反省しています。もしこの記事を見ている学生さんで似たようなことを思っている人がいたら、いくら下手な英語でも全く気にならないので、積極的に留学生や外国人研究者に話しかけてみてください。英語の練習になりますし、相手も嬉しいと思います。

最後にちょっと面白い違いとして、中国の大学には『マニュアル』のようなものがないそうです。学務や予算運用の手續きに関連して「手順をまとめた書類やToDoリストのようなものがないのか」と聞いたところ、「学部創設時のものはあるが古くて使えない。つまり実質ない」との返答をいただきました¹³。「何故ないのか」「不便だから作れないのか」と聞くと、「ルールが頻繁に変わるから頻繁に更新しなければならずコストが悪い。毎回担当事務に確認してくれ」とのことでした。毎回確認される方が非効率な気がするのですが、これも文化の違いなのかもしれません。

5. 中国のポストってどうなの？

はじめに書いたように、中国では天文台・望遠鏡の新設に伴って天文学科が新設されており、教員・ポストクの数も増加傾向にあります。少なくとも公募の数は他地域に比べて多いでしょう。求職中の方の参

¹⁰地元民にも寮の部屋はほぼ無料で支給されます。ただし家が近い人は家から通って、寮の部屋は荷物置き場にしているそうです。

¹¹学外のレストランの値段は実は日本と大差ないのですが、学食では1食200円程で食べられます。今の私の最寄り学食は1食300円程なのですが、学生は高いと文句を言っています。

¹²完全に余談ですが、北京にはNBF (Nihon Bowlers Federation) 唯一の海外支部があり、毎週リーグ戦をやっています。

¹³北京大学のKIAA (Kavli Institute for Astronomy and Astrophysics) は例外で、英語のマニュアルが存在し、定期的に更新されています。事務の人も全員英語で対応してくれますし、情報メールのほとんどは英訳付きで回ってきます。上海のTDLI (Tsung-Dao Lee Institute) も例外側かもしれませんが [1]。

考になるかもしれないので、ここで私が経験した中国での公募・待遇などについて、情報を共有したいと思います。

求職中で海外のポジションの情報を調べている人の中には、「公募が多いっていうけど、中国の公募そんなに見ないぞ」と思っている人もいられるかもしれません。これはまさしくその通りで、いきなり最も重要な注意事項なのですが、なぜか中国の大学は公募を宣伝しません。清華大学・北京大学などの一部大学はAAS Job Registerなどに公募を載せていますが、これらはむしろ例外です。「公募は大学のホームページに公示されるだけ。後は教員が口頭で宣伝。」これが中国のスタンダードです。人によっては、国際会議の発表中に中国人が自大学の公募を宣伝しているのを見たことがあるでしょう。これが中国では一般的な、公募の宣伝方法だそうです。別に出来レースというわけではなく誰でも応募可能で、外国人の応募も歓迎しているようですが、何故か組織としての宣伝はせず、口コミ頼りなのです。なのでもし中国でのポストに興味があるなら、中国人の知り合いに「今ポスト探してるんだよね」と言うっておくことが大切です。そうするとその人が、中国人コミュニティで仕入れた公募情報を教えてくれるはずですが、私自身、清華大学と北京大学のポスドク職はAAS Job Registerで見つけて応募したものでしたが、今の中山大学での助教職は「就活中です!」と宣伝した結果教えてもらったという経緯があります。選択肢が増えて損はないと思うので、中国でポジションに着いても良いと思っている方は積極的に宣伝すると良いと思います。

次にポスドクについて。待遇面ですが、いわゆる科研費ポスドクの給与は日本の学振PDより少し安いと思います。ただし大学ごとにフェローシップが存在し、これらの給与は学振PDと同程度以上となっています。明言はされていませんが外国人はフェローの選考においてかなり有利だと思われ、私も含め知り合いの外国人は大抵採用されています。ただ注意が必要なのは、「その大学への所属が確定した人間しか応募できない場合がある」という点です。つまり、「フェローが取れたら行くけど科研費ポスドクなら行かない」ができない場合があるので、オファーの条件交渉で詳細を確認してください。最初から直接フェローに応募する場合は大丈夫です¹⁴。ちなみにこれ

は宣伝ですが、中山大学には年収50万円¹⁵以上という、欧米からの応募を狙った高給フェローシップが存在します。興味がある方からの連絡をお待ちしています。

教員の待遇は大学によってかなり違うようなので、ここでは私が把握する限りの助教の制度と採用手順について共有したいと思います。中国では最近まで助教授というのは一般的ではなく、基本的に教員といえば教授と准教授（中国語では副教授）のことだったようです。両方パーマメントなので、教員＝パーマメントでした。ただ最近になって欧米とシステムを合わせようという動きがあって、テニュアトラック助教が新設されつつあります。幸か不幸か私は中山大学物理与天文学院（与は&のような意味）でのテニュアトラック助教第一世代であり、数少ない有期雇用教員ということになります。契約は6年で、3年目にテニュア審査、ダメなら6年目に再審査となります。ただしまだ「とりあえずテニュアトラック助教始めてみました」みたいな状況で、大学の制度上助教は存在しません。そのため書類上の私の身分は副教授となっており、場合によって職称を使い分ける必要があるややこしい状況です¹⁶。

助教公募の選考方法は、書類選考を通過した経験が1度しかないのでサンプルは少ないですが、書類選考と3度のオンライン面接（学科レベル、学部レベル、大学レベル。2度目の面接は模擬授業を含む）でした。また自分の選考経験ではないですが、北京大学のKIAAにポスドクでいた時は、教員公募のショートリストが所属する学生・ポスドクに公開され、公開セミナー、学生・ポスドクの有志による面接を経てクローズドの面接に続くようでした。これもアメリカ式っぽいですが、出資母体のKavli財団がアメリカ系なのでその影響でしょう。以上2件についてしかわかりませんが、参考になれば幸いです。

最後に中国でのポスドクの扱いについて、最近面

¹⁴ちなみに私は北京大学にKIAAフェローとして着任し、その後大学のBoyaフェローを取って昇給しました。同じ組織でも複数のフェローが存在する場合があります。

¹⁵為替の影響もあるので、日本円でいくらになるかは各自調べてください。助教の私の給料より高いとだけ言っておきます。

¹⁶カジュアルな場合には助教、科研費の応募や公式書類への署名では副教授ですが、フォーマル度合いがわからない書類ではどっちを書けばいいのか困ります。

白いことに気づいたので紹介させてください。テニュアトラック助教の制度が確立されていないという話をしましたが、ポストクの扱いも確立されていないというか、変な形で確立されたというべきでしょうか。実は中国のポストクは形式上、博士課程の上のレベルの学生扱いらしいのです。「助教をとりあえず准教授の枠に入れる」みたいに、「教員じゃないポストクはとりあえず学生の枠に入れる」ということでしょうか。なのであくまで形式上ですが、ポストク修了論文も¹⁷、ポストクディフェンスの公聴会も¹⁸、ポストク修了証書もあります¹⁹。文化の違いというか、辻褃合わせの結果生まれた制度が残っているんだと思いますが、「制度なんか整える前にとりあえずやろう」という行動力はすごいと思います。

6. おわりに

海外で研究というとやはりアメリカやヨーロッパのイメージが強いと思います。海外でポストを探す

¹⁷ 出版論文に中国語のアブストをつけるだけです。

¹⁸ 最後のセミナー発表をこれにあてます。一応参加教員の人数が5人必要なので、足りない場合は知り合いに頼んでてもらいます。

¹⁹ 紙はありません。欲しければ電子的にダウンロードできるのですが、知らされてもいませんでした。一応中国国内では学位扱いのため、教員採用の際に提出を要求されました。この時初めてポストクの真実に気づき、笑いました。

際、中国は候補にも入れていない人の方が多いのではないのでしょうか。正直惑星・天文は中国ではまだまだ発展途上の分野で、研究の広がり求めて海外へ行く場合は、欧米の方が良いことが多いでしょう。ただ最近では欧米で学位を取った中国人研究者が多く中国に戻っており、研究者の数も質も急激に伸びています。また発展途上ということは、ポジションを取るチャンスともいえます。どの国へ行くのか、あるいは日本で研究を続けるのか、各人で状況が違うので、何が最善かは人によるかと思います。なので「中国が良いよ」などと気軽に言う気はありませんが、「中国という選択肢もあるよ」と伝えられればと思ってこの記事を書きました。この記事を通じて皆さんの進路の選択肢が増えれば幸いです。

参考文献

- [1] 萩原正博, 2025, 遊星人 34, 67.
- [2] 門屋辰太郎, 2020, 遊星人 29, 38.

著者紹介

青山 雄彦



中山大学助教。東京大学理学部地球惑星科学専攻博士課程修了。博士(理学)。東京大学、清華大学、北京大学での研究員を経て2024年より現職。専門はガス惑星の形成。日本惑星科学会・日本天文学会所属。